

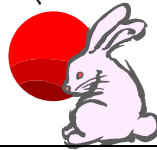


横浜陶芸友の会だより

第 145 号
平成 23 年
1 月 1 日発行

会場でお会いしましょう

皆様お元気ですか。平成 23 年を迎え、益々御健勝のこととお喜び申し上げます。



さて、皆様、横浜陶芸友の会の魅力は何でしょうか？

私は会長としてちよつと立ち止まり考えてみました。そして、どなたにお聞きしても同じ答えが返ってくるのではないかと思うのですが、次の 2 点を挙げてみました。

第一として、お互いの陶芸に関する技術や知識を学びあい高めあうことができること。
第二に、お互いの知識や技術を通してその個性を認めあうことが出来ることだと思います。そして、この二つを通して私たちはお互いに影響しあう中で、それぞれの感性を磨き、生活がより豊かに、より充実したものになっているということだと思います。

このことを念頭において、是非皆様、正月に行われる作品展及び懇親会にふるってご参

加ください。そして、お互いの存在を確かめ合い、陶芸を通して、ご自分の生き方をより潤いのある、楽しいものにしていただければ幸いです。

また、作品展では毎年、私立の聖坂養護学校を始め、横浜市立の特別支援学校の児童・生徒さんの作品も同時に展示しています。このことは、私たちにとつても、御来場くださる一般の方々にとりましても、大変、意義があることだと思います。私は長年特別支援教育に携わってまいりましたが、障がいがあるといわれる子どもたちの持つ純真さとその作品の放つ輝きにはいつも目を見張ります。彼らの作品から放たれる無尽蔵のエネルギーを私たちが感じ、共感することが出来たら最高の展示会になると思います。皆様、特別支援学校の子どもの作品にも足を止め、じっくり向き合っていたいただければ幸いです。それでは会場でお会いしましょう。

会長 松崎 紀一

第 32 回 『友の会作品展』お知らせ

今年度の『作品展』がまもなく始まりです。もう、申し込みはお済でしょうか？今年度は、六日間の開催です。

上手、下手ではなくお互いの技量を高め学びあっていく場にするためにも会員の皆様には奮って出展下さいますようお願い申し上げます。

【場所】 横浜市民ギャラリー 一階

(教育文化センター内 JR 関内駅下車)

【会期】平成 23 年 1 月 12 日(水)～17 日(月)

【出展料】 一区画(幅 30 cm) 二千元

【特設コーナー】「豆皿」(直径 6 cm 以内)

3 個まで

※出展料は無料

事業部 鍋島 記

懇親会

【場所】 関内駅の傍にある CERTE(セルテ 7F)

『千年の宴』

Tel 045-663-4488

【日時】 1 月 15 日 6 時半～

【会費】 ¥4500-

掘り炬燵の部屋で、鍋をつつきながら懇親を深めましょう。

副会長

事業部より

(締め切り 1 月 12 日まで)

『美濃焼』窯場見学会 報告

【期日】 平成 22 年 11 月 12 日（金）
13 日（土）

【見学場所】 岐阜県 多治見市、可児市、
土岐市

【参加人数】 40 名



訪ねた作家陶家 及び 見学先

○若尾利貞

個展に作品を出展する前であつたため志野や鼠志野、織部、人形等のたくさん作品を見ることができました。和室には茶事を楽しむ食器や明り立てがセットされていました。又、経先生（息子さん）のすばらしい青磁の作品もありました。

「プロと競争しないで無心でつくるのがいい。楽しんでやるのがいい。」と、穏やかに話し始めた先生は「志野焼」の歴史、土、焼成、鼠志野の制作過程まで説明してくださいました。窯場では経先生にもお会いし、お話を伺うことができました。

○鈴木蔵

まず、お庭の紅葉したモミジの美しさに見とれてしまいました。

「家には作品はなにもないよ。」の言葉どおり志野の花器と灰皿だけでした。何も話すことはないと言いながら、昭和 5 年に志野の破片を拾い、窯跡を探したことや「志野焼」の歴史、作陶への熱い想いなど分かりやすく話してくださいました。

又、ガス窯での焼成の質問にも答えてくださいました。窯場では、織部窯・志野窯、徹先生（息子さん）のすばらしい勢いのある織部の作品も見ることができました。

○加藤幸兵衛

・・・市之倉さかづき美術館

幸兵衛窯には、さかづき美術館をはじめ古陶磁資料館・工芸館・食器展示室など見学場所が多くあり、前半は各自で自由に見学をしました。

さかづき美術館では幕末から明治にかけての市之倉さかづきや他産地の変わり盃、世界の酒器や市之倉の名工たちの名品をみることができました。

幸兵衛窯の工芸館には 5 代、7 代幸兵衛、長男の亮太郎氏の作品がありました。

200 年前の古民家を移築した古陶磁資料館には、加藤卓男氏の 40 年にわたるペルシャ陶器研究の資料、中国、朝鮮、美濃古陶などが展示されていました。

特別展示室では低温による還元焼成の金に似たラスタ―彩に指でさわって鑑賞することができました。

食器展示室には販売用の幸兵衛窯の作品が





○加藤康景

あり、すばらしい作品を購入することができました。
見学の最後は全員集合し、7代幸兵衛氏のお話を伺いました。
幸兵衛窯は1804年美濃国市之倉郷に初代幸兵衛が開窯した歴史の話から始まり、七代幸兵衛がラスタ―彩復活に力を入れ、ペルシヤブルー、ペルシヤ三彩などのペルシヤ技法による製作に本格的に力を入れるまでのことや、「幸兵衛窯で再生したペルシヤの技法を生まれた国イランに返すこと」と、これからの夢まで伺うことができました。2年後には現地で個展を開く計画もあるようです。

飛騨から移築したギャラリーの素晴らしさに感動し、そこで加藤氏の話の伺いました。今回訪問の作陶家の中で一番の若手の加藤氏は当日も個展開催中でしたが、快く対応してくださいました。

美濃陶祖 14代目の加

藤氏の2階には織田信長から認められた朱印状が飾られていました。志野・織部の素晴らしい作品も沢山展示されていました。作品を裏返しにしながら、製作方法や志野・織部の焼成についても説明していただきました。
見学会解散後に、開催中の個展会場と時間を教えていただき、十数名の方々が会場に伺ったようです。

○塚本 満

ギャラリーには青白磁、白磁の作品が展示されていて、その美しさに感動しました。「土物もいいけど、磁器もね」と、言いながらじっくり鑑賞できました。父、快示氏の作品を見せながら青白磁、白磁の話や、文様の付け方では手作りのカンナを手を持ち実際に彫りながら説明をしてくださいました。実際やつて見た人もいましたが、なかなか難しそうでした。道具の作り方の説明もしてくださいました。ここで、作品を買われた方々はたくさんいました。



○瀧口喜兵衛

瀧口氏の工房は山道を歩く距離があるので心配していましたが天気も良く、その山道

をバスが近くまで入り、スムーズに伺うことができました。工房はすぐに、実演に入れるように準備がして

ありました。前日にはバスが通れるように道の木を切ってくださいったり、椅子を並べてくださったりと細かく気をつかってくださる瀧口先生に感動しました。

実演では手回しロクロで茶碗や香合、型おこし、削りと料理番組のように段階的に準備ができていました。温かい線の器が短時間にたくさんできました。型が崩れない方法等いろいろな秘密兵器も見せていただきました。最後には、人数分ぐい飲みが用意してあり、自分で「絵付け」したものを焼いていただけという、すばらしいプレゼントまでいただき、秋の森の中で絵付けを楽しみました。このサプライズにも大感動。さて、焼き上がりを楽しみですね。帰り道は、荒川豊蔵ゆかりの歴史的な織部陶の窯場だった可児市大萱の弥七田窯跡の説明もしていただきました。



○宿泊場所

柿野温泉「八勝園湯元館」

ヌルヌルしたお湯が好評でした。



○昼食場所

12 日(金) 「魚三」

13 日(土) 和食 めん処「サガミ」

【感想】

名古屋を出発する時は雨が降り心配しましたが、時間と共に天気は回復し、今回も天気に恵まれた二日間でした。少々山道もありま



が、大きなトラブルもなく終了できました。いろいろな方法で有効に楽しめた人も多かつ

したが、紅葉の美しい木々を眺めながら楽しく歩くことができ、今回は初めて「現地集合・解散」で行い、多少心配しました

たようです。(ただ、

一人での距離が長いと大変な人もいます

ので、その点については今後検討したい

と思います。)たまにはこんな方法もよさ

そうですね。

今回の作家の方々もどんな時でも優しく熱心に対応してく

ださいましたが、見学者の熱意がすばらしいからだ今回も見学

の様子を見ていて思いました。

終わってみると、失礼やご迷惑をおかけしたことも多々あったと思いますが、今回も参加者みなさんの「ありがとう。よかったわ」の言葉に励まされ楽しい二日間でした。ありがとうございました。

今回の感動、幸せな気持ちをそのまま書き、美濃の作家の方々の礼状にしたいと思っております。

事業部 清水あや子 記

今年の見学会は人気の有る美濃焼きなので現地集合にもかかわらず、多数の参加が有りま

窯場見学感想



鈴木 貴久



した。志野焼きの実力者である鈴木・若尾先生

大きな窯元の幸兵衛・若手の加藤先生・そして楽しいお話と作陶の実演までして下さった

瀧口先生等、事業部の目利き幹事が厳選した「良い処取り」の旅行でした。参加者も先生

方の説明をメモに書きとめる等、熱心な態度でしたので好印象を感じて下さったと思いま

す。志野の若尾先生の奥様が「窯出しの時に失敗だったらどうしよう。何年やっても不安

です。」とお話しされていた事が印象的でした。第一人者にして難しい、判らないという

謙虚さを素晴らしいなと思いました。

今回は志野・織部・黄瀬戸・青白磁の代表作家だけを見学したので、お住まいも立派な方ばかりでしたが大多数の窯元は美濃に限らず

経済的に苦しいと聞いたことがあります。私達の多くは失敗しても生活を逼迫する事の

無いシロートですから、失敗を恐れず先生方から得たヒントや教

えを忘れない内に実践してみ、という事も楽しいと思います。私な

ぞ失敗の数だけは会の中でトップクラスだと自慢しております。



多種多彩の美濃焼の里へ

志野・織部・黄瀬戸：陶好の旅 石川 光子
私達夫婦、

始めて友の会窯場見学に参加させていただき
ました。お会いしたい陶芸家のお宅訪問を入
れた旅を楽しむ私達、多治見・土岐・瑞浪は
何回も楽しんだ所ですが、今回友の会の皆様
と楽しい時間を過ごさせていただきました。

各、作家さんの熱心な心惹かれるお話と美濃
の土味を出された作品に感動！幸せな気分い
っぱい！の陶好旅行でした。加藤康景先生の
ギャラリー内、正面の黄瀬戸茶碗の素晴らし
さに感動！幾度も幾度も眺めてしまいました。
先生の黄瀬戸に魅せられ名古屋駅で皆様と解
散後、タクシーで追っかけを…。加藤康景先
生はあれから名古屋駅松坂屋7階ギャラリー
へ急がれて、さむえ姿から変身して背広姿、
どれも欲しくなる作品ばかりでした。お陰様
で毎日あれあれ？会話の私達：デジカメの写
真と映像、購入作品を楽しみながら会話も弾
みます。

事業部の皆様、会員の皆様大変お世話にな
り有難うございました。心からお礼申し上げ
ます。



九谷上絵付講習会

さる10月19日に九谷焼本場から 山口義
博先生を招き、顔料の扱い方・上絵付け方法
など講習していただきました。参加者は9名
でした。詳しくはホームページをご覧ください。

陶工房ろ 山村 隆（九生）

今まで、絵付と言えば鉄や呉須の下絵付が
主で、上絵付は独学で学んだ洋絵具や赤絵
をたまにやる程度でした。本格的な和絵具
の上絵付はやったことがなかったので、良
いチャンスと思いましたが。

絵具の溶き液（水・番茶・膠）の使い方
や手順、斜面などに塗る時に加える流れ止
液の代用品、線描きの赤絵具専用の膠のこ
と、市販の筆をカリッと線が描けるように
細工する方法等々：文献には書かれていな
い技をいろいろと教えていただきました。

只、絵付作業に追われてしまつて、もつ
とあれもこれもお聞きしておけば良かった
と今更ながらに思っています。質問の時間
を別にとって貰えたら良かったのかなと思
います。

山口先生に遠路教えにお出でいただいた
お陰で、九谷の絵付のことがより身近に感
じられるようになりました。これをキッカ
ケにいろいろチャレンジしてみたいと思っ
ています。



絵付け講習の風景（描いてる時は真剣！終わったら途端に賑やか）

陶陶さん



さあ！
作品展
ですよ

第 67 号

あかほし



「役員会だより」

APECが終わって、やっとウロウロ出来る
11月20日(土) 役員会開催、18名参加で
白熱会議、作品展が近づいていることもあり、
いろいろな意見が続出。

○窯場見学会報告

○作品展について

○焼成会報告

○現在検討している「横浜陶芸友の会の活動方針と活動費の考え方(まだまだ練り込み中)」と、2時間以上の討議討論。友の会の行事は毎年同じ事の繰り返しだと思っていましたが・・・友の会も年々動いていることに気づきました。
もともと楽しいことには、積極的に
なるといいですね。
総務 大内記

第12回「ぐい呑み会」を主催して

大日方 毅

今年のぐい呑み会は昨年と同じく一日一客のおもてなしの一軒家『空』にて、7名というアットホームな雰囲気の中で行われました。今回主催者として、この会を進めるにあたり、
①『一日一客のおもてなしの心と、もてなされる心がマッチした会』・・・これは行き届いた接客と 気持ちの込められた料理を堪能しながら、各人が持ち寄った「ぐい呑み」にまつわるエピソードを全員が披露しました。和気あいあいとした中にも、ぐい呑みに対する強い作陶意識を感じることが出来ました。
②『来年に向けて夢のある会』となるよう心掛けました。・・・これについては「宝くじ」を賞品とするビンゴゲームを行い、この会報が出るころには億万長者が出る？という夢のもと、全員真剣な眼差しでゲームに熱中していました。

来る年も元気でいい作品が出来ますようにと願いつつ、会はお開きとなりました。

(「ぐい呑み会」風景、シヤッターの主は主催者本人のため6人しか写っていません)



編集後記

人によるのですが、老齢になると新年を迎えるこの先の展望より来し方への思いと感謝がつのります。時間は後ろしか見えません。過ぎてからシマッタと思ってももう遅いのです。大皿の底を削りすぎて失敗し、削り足りなくてシマッタ。いつもこの繰り返しです。
吉良

ホームページもチェック!!

横浜陶芸友の会

検索

<http://www20.atpages.jp/tomonokai/>

横浜陶芸友の会だより

第145号

(平成23年1月1日発行)

発行人 横浜陶芸友の会

会長 松崎 紀一

編集責任者 広報部長 吉良謙